



No.32

1991年12月発行

新潟県支部報

私のフィールド

「魚沼スカイライン・枯木又・十二峠」

山田正志

魚野川を挟んで遠く越後三山が一望できる魚沼スカイライン。枯木又部落から十二峠まで南北約20kmのコース、それが私のフィールドです。鳥相はとても豊富で、小鳥類から猛禽類まで観察されます。当間山付近は特に野鳥の種類が豊富で、年間を通して約九十種類を観察できます。仕事の関係で比較的自由時間を多く取ることが出来、時間の許す限り、双眼鏡を片手に飛び回っています。当間山付近では、一個所にいながらにして、ホトトギス、カッコウ、ツツドリ、ジュウイチのホトトギス科の鳥が仲良く鳴き合っているのを聞くことができ、又キツキ類の密度も濃くて、土倉部落の北側斜面に広がるブナの防災林では、アカゲラ、オオアカゲラ、アオゲラ、コゲラと四種類のキツキを三月から四月にかけて観察することが出来ます。キツキのドラミングはとても素晴らしいもので、まだ車が途中までしか行けず、凍み渡りをしながら行って聞く、キツキのドラミングは汗を吹飛ばしてくれます。スカイライン周辺には、ニューナイスズメの姿も多く観察され、スキー場のゲレンデ内を縄張りしているニューナイスズメは、巣を作るのに適当な木が、皆切倒されてしまって、スキーリフトの鉄パイプの穴等に巣を作っており、コゲラの掘った新しい巣穴を横取りするのも見かけます。猛禽類も割合に多く見れ、イヌワシ、クマタカ、オオ



オオアカゲラ (岡田成弘撮影)

タカ、ハイタカ、サシバ、ハチクマ、ノスリ等が観察され、イヌワシは苗場山を縄張りにしている個体が飛来するものと思われ、ハイタカ、サシバ、ハチクマ、ノスリは繁殖しているものと思われる。フクロウ類も、フクロウ、アオバズク、コノハズクの鳴声が夕方から聞け、年に二・三回大親友である、アルコール君と夜明しで聞きに出かけます。この他にもカワセミ類や、ヒタキ類、カラ類と色々な鳥を観察することが出来、鳥の種類が豊富な理由として、防災森には多くの、ブナの古木が残されていること、急斜面のため、あまり人が近づかないこと等によるものと思われる。スカイラインに広がっていた広葉樹森が次々に消えてしまい針葉樹森に変わり、そこで見れる鳥は、ホオジロやヒヨドリ位で、イヌワシの姿や、コノハズクの鳴声をいつまで楽しめるかとても気掛りである。

〈野鳥研究 I〉

トラフズク (Aiso otus) の繁殖

藤宮 弘子

はじめに

トラフズクは英名 (Long-eared Owl) が示すように長い耳羽を持った中型のフクロウです。ユーラシア大陸と北米大陸の温帯から亜寒帯にかけて広く分布し、日本でも本州中部以北の平野部、低山帯で繁殖しています。また冬期には南へ渡り、常緑樹や針葉樹の林で越冬することが知られています。

県内では、下越地方を中心に夏鳥として生息が確認されていますが、新潟市近郊では、7、8年程前より繁殖が確認されたり、幼鳥が保護されたりしていました。

今回、新潟市近郊でトラフズクの繁殖が数例確認されたので、その観察の結果を報告したいと思います。

(渡来期) トラフズクとの出会い

私の住んでいる白根市庄瀬は信濃川の左岸に位置し、果物栽培、稲作などの農村地帯です。

まだ雪の残る3月4日AM10:00頃に、知人から「家の裏の杉の木に変な鳥がいる」との連絡を受け、すぐに出かけてみました。その家の窓からわずか3m位しか離れていない高さ6m位で、さほど大きくもない杉の木に1羽の成鳥が止っていました。トラフズクとの初めての出会いでした。その後、何度か観察を重ねている3月の下旬頃に10m程離れた杉の木に止まる2羽の成鳥を確認することができました。もしかすると番ではないかと考えました。

(営巣環境)

今回トラフズクの繁殖活動を白根市3ヶ所、潟東村1ヶ所、計4ヶ所確認しましたが、観察回数が多い白根のA地点の観察についてお話しします。



写真1 トラフズクの成鳥

5月13日 A地点の大きなケヤキの木に白いフンを見つけました。木の上に目をやると地上7m位の二股になっている所に小枝を集めて作った巣があり、2羽の雛が動いているのを発見しました。その木は親鳥がいた場所から70m程離れた所です。巣のあったケヤキの木は直径55cm、そのとなりの杉の木は40cm、高さはいずれも20m程です。しかも市道から5m、その家の窓から3m程しか離れておらず、この家の車が真下を往来します。巣の下にはネズミの死骸やペリットがたくさん落ちていました。ペリットの中身はネズミの頭蓋骨や毛、小鳥類の頭蓋骨がほとんどです。

(繁殖と観察)

観察は時間のゆるす範囲で行いました。5月から6月にかけての記録を日ごとに追ってみます。

- ・5月14日 巣の中に雛1羽、近くの杉の木に2羽とまる。

- ・5月15日 昨日巣の中にいた1羽も巣立った。家の前の柿の木に1羽、巣のとなりの杉の木に親鳥1羽、幼鳥2羽、裏の杉の木に幼鳥がもう1羽止っている。全体に白っぽい綿毛が多く見られた。

- ・5月16日 昨日と同じ柿の木に1羽、他の幼鳥は杉の木にとまっていたが、必ず親鳥が近くの木にいて警戒にあたっていた。
- ・5月19日～21日はほぼ同じ行動をとった。
- ・5月23日 巣から30m離れた栗林の中に幼鳥4羽と親鳥を確認。羽毛全体が黒っぽくなり、目も鋭さが増している。
- ・5月27日、30日栗林の中に幼鳥が5羽
- ・5月31日 顔が黒っぽくなり、耳羽が伸びてきた。胸も白い綿毛から茶色の羽毛に変わり、横斑が見える。目つきは更に鋭くなった。やはり親鳥はメスが近くに止まり、オスは少し離れた場所にいた。
- ・6月3日～5日 ほぼ同じ行動をとった。
- ・6月8日～9日 1羽も姿見えず。
- ・6月20日 巣から150m位の所で幼鳥の鳴き声が聞かれた。
- ・6月29日 幼鳥2羽の鳴き声、1羽は電線に止まる。
- ・8月24日 幼鳥1羽
- ・9月1日 杉の木に幼鳥1羽

(まとめ)

今回の観察で確認されたトラフズクの幼鳥は、A地点で5羽、A地点から400m離れたB地点では6月2日に4羽、C地点では3羽、潟東村のD地点では4羽でした。トラフズクは普通4～6個の卵を産みますから、雛の数は4～5羽で育雛状態は比較的良好のように思えます。

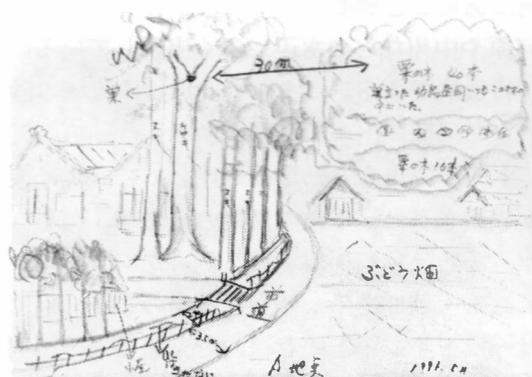


図1 営巣環境



写真2 巣立った雛鷹

環境としての特徴は、ケヤキの木に営巣し、主に杉の木に止っていました。また近くに桜、柿等の雑木が多く、栗林やリンゴ、ぶどうの果樹園があることです。この果樹園に集まるネズミ等を主食にしているようです。止まり木の下から採集したペレットを調べてみたところ、ハタネズミの骨や毛、鳥類も多くホオジロ類、スズメ、ハクセキレイ等の骨や羽毛がありました。

繁殖期間は、3月上旬に番が形成され、5月中旬に巣立ちしました。巣立ち後一ヶ月程度は親のテリトリーにとどまっていた。巣はA地点でカラス、C地点でキジバトの古巣を利用しました。残りの巣は古巣なのか、自力で作ったのかは確認できませんでした。

ところでトラフズクは5月中下旬に産卵し、抱卵に27～28日、育雛に23～24かかるといわれているが、これに比べると、この地域の個体はかなり早い繁殖のようです。

今回偶然トラフズクの繁殖を観察することができて感じた事は、信濃川の流れる白根市周辺で意外に多くのトラフズクが観察された事です。まだ観察を始めたばかりで不明な点が多いのですが、今後も更に調査して、その生態を明らかにしていきたいと思えます。

最後にC、D地点の観察に協力、助言をいただいた、佐藤吟一氏、岡田成弘氏に厚くお礼申し上げます。

〈野鳥研究 II〉

新潟県の主な河川におけるセキレイ類3種の分布調査(II)

— 信 濃 川 —

渡 辺 央

県内の河川流域におけるセキレイ類3種の分布、とりわけハクセキレイの内陸部への侵入状況を中心に調べているが、今回は県中央部を縦断する信濃川本流域の結果についてみてみたい。

信濃川のセキレイ類の分布については、1987年の5～6月に調査を行い、すでに信濃川の野鳥(長岡野鳥の会、1989)に紹介しているが、今回はそれらの資料に当時まだ未整理であった出現場所のデータを加えて報告したい。

信濃川本流の河川景観は県境の津南町から十日町市までの間は、河床に大きな岩石等もあり上流域の景観を示す所もあるが、全般的には中流域である。川口町で最大の支流である魚野川を合わせ、広い砂れきの河原を伴って小千谷市から長岡市に入り、長生橋付近から下流域の景観を強めるようになる。大河津分水で分水路(今回の調査には入っていない)が分かれるが、本流は三条市、白根市、新津市などを経て新潟市から日本海に注ぐ。

1 出現個体数と分布

調査区間で観察された3種のセキレイ類の個体数と出現回数を5区域に分けて表1に、また各種の出現地点を図1にそれぞれ示した。それによると各種の分布は長い流域の中でかなり明瞭な相違を示している。ハクセキレイは個体数、出現回数とも多く、河口を含む新潟市から新津市までの間には特に多いが、それよりも上流の中流域にも普通に分布している。この点他の2種の分布が中流域に極端に偏っているのは明らかな違いをみせる。このことはハクセキレイの環境選択の広さを示して

いるといえるだろう。セグロセキレイは新潟市から黒埼町までの間には全く観察されなかった。新津市に遡って初めて1羽が排水機場の建物に出現したが、大河津分水から下流の地域には極めて少ないことが明らかになった。本種の個体数は長岡市から上流、つまり、中流域に多く、それはハクセキレイを上回るようになる。同様にキセキレイも長岡市から上流に分布がみられた。とはいえ、ハクセキレイも中流域には普通に分布しており、すでに県境の宮野原まで達していることがわかった。

2 出現場所と営巣場所

ハクセキレイは流域のいろいろな場所に平均的に出現しており、流域にある人工構築物を広く利用していることがわかる(図2)。同時に新潟市などではコンクリート護岸やアスファルトの堤防上でも索餌しているのがよく観察された。ハクセキレイの営巣が確認された6例について、その営巣場所を見ると、排水機場1例、工場1例、ダム1例、砂利採取場3例であった。セグロセキレイは流域にある生コン工場や砂利採取場(両者が同じ構内にあることが多い)に最も多いが、次いで河原や中州などの水辺に多く出現しているのが特徴的である。つまり、本種は中流域の砂れきの河原に出現が意外と多く、今回の調査でも河原で巣立ち幼鳥に給仕している2家族が観察された。本種の営巣の確認は3例あるが、それは砂利採取場に2例、ダム(宮中ダム)に1例である。砂利採取場の2例の中にはハクセキレイと同じ構内で繁殖している例があり、ここではハクセキレイが建物の桁に、セグロセキレイはそのすぐ近くにある機械の

中に営巣していた。キセキレイは上流部に多いことを反映して、小千谷市や十日町市などにある発電所やダムに出現することが多かつ

た。しかし、本種の営巣は十日町市の人家の屋根に1例だけ確認された。

表1 信濃川本流域におけるセキレイ類3種の出現個体数と出現回数

種 類 \ 区 域	新潟市～ 新津市	白根市～ 栄 町	分水町～ 与板町	長岡市～ 川口町	十日町市～ 津南町	合 計
ハクセキレイ	26 (23)	12 (11)	2 (1)	10 (9)	12 (8)	62 (52)
セグロセキレイ	1 (1)	1 (1)	3 (1)	27 (20)	16 (13)	48 (36)
キセキレイ	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (7)	12 (10)	20 (17)
合 計	27 (24)	13 (12)	5 (2)	45 (36)	40 (31)	130 (105)

() 内は出現回数



図1 信濃川のセキレイ類3種の分布

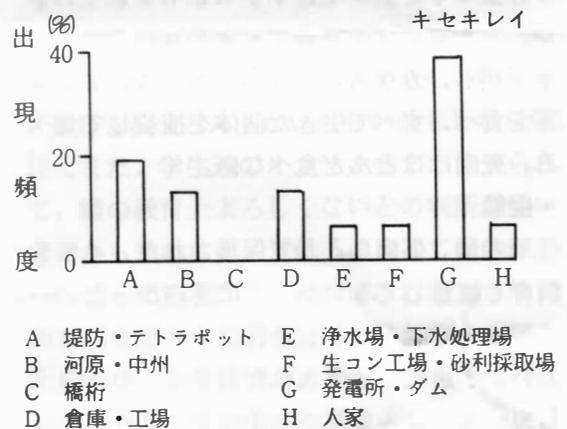
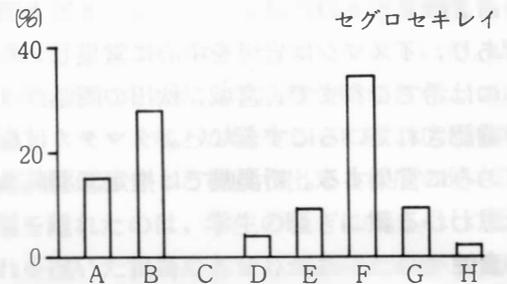
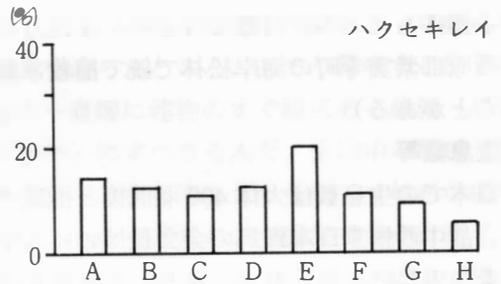


図2 環境別出現頻度

〈猛禽類シリーズ VX〉

ク マ タ カ

風 間 辰 夫

・分布

日本産のクマタカは、世界で一番大型であり、スリランカ、インド、ヒマラヤ、中国南東部、台湾等に分布するタイワンクマタカよりひとまわり大きい。日本では北海道、本州四国、九州で繁殖している留鳥である。主として標高 500メートルから 2500メートル位の山地に生息するが、冬期は海岸線まで移動する個体もある（新潟県では昭和45年12月に北蒲原郡紫雲寺町の海岸松林で銃で捕殺されたことがある）。

・生息数等

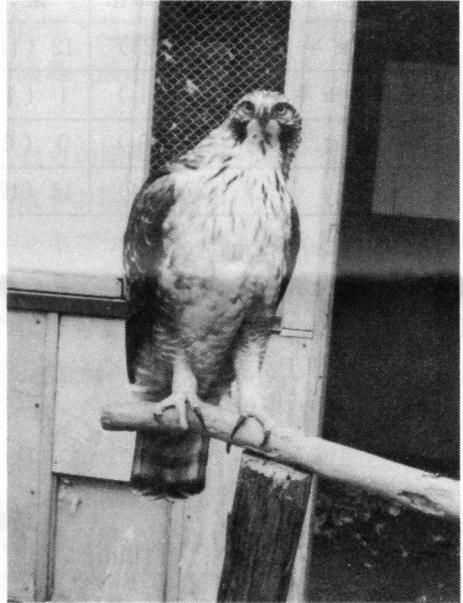
日本での生息数は大体 400羽前後と推定され、故中西悟堂日本野鳥の会会長は、イヌワシより少ないと言っておられた。イヌワシが普通2卵であるのに対して、クマタカは1卵であり、イヌワシは岩場を中心に営巣し、樹木には希でこれまで、宮城、秋田の両県だけで確認されているにすぎない。クマタカは樹木のみで営巣する。新潟県では推定30羽前後と思われる。

・食性

ノウサギ、タヌキ、キツネ、ヤマドリ、キジ、カルガモ、マガモ、オオタカ、ノスリ、キジバト、カケス、ハシボソガラス、アヒル等を食べ、すべて生きた個体を捕殺して食べる。死肉はほとんど食べない。

・生態

筆者は、傷病鳥として保護された、4羽を飼育し観察してみたが、実に面白かった。一、二例をあげてみると、動作はイヌワシよりにぶい。十日町で保護された若鳥は、池に遊泳していたアヒルを襲い水中に突っ込み、おぼれて死にそうになったところを保護された。山形県で保護されたふ化後7日目位の個体は



クマタカの幼鳥

30日目に、ふ化後20日目のキジのヒナを与えたら（生きている個体）驚いて逃げまどい、自分より体重が15分の1しかないキジのヒナを恐れおののいていた姿は実にこっけいであった。

主として♂♀で生活し、かなり広いテリトリーを保持している。鳴き声はまれといわれているが飼育下では非常によく鳴く。ピーー、ピーー、ピピピピーピピとかなり長時間鳴く。普通卵は1個であり、まれに2個産む。

成鳥♂の体重は2キロ前後であり、♀は3キロ前後である（現在愛鳥センターで飼育している個体は♀で、体重3.5キロある）。

・鷹匠に飼育された最後のタカ

日本でただ1人の人間国宝（無形文化財）“匠鷹”沓沢朝治さん（山形県）が故人となられて数年たった今日、環境庁の強い指導方針でいかなる理由があってもタカ類の飼育は認めないので、現在文化庁の認めている鷹匠は

1人もいない(ワシタカ類は県が傷病鳥として飼育するもの以外は認められない)。

クマタカは現在トキと同じく、絶滅危惧種であり、特殊鳥類に指定され、日本のワシタカの中では、イヌワシに次いで貴重種である。

タカ狩りは、天皇、公家、大名等が行った狩猟であり、日本へ伝来されたのが西暦360年ころの仁徳天皇の時代であり、醍醐天皇、一条天皇のオオタカは、古今の名タカといわれた。織田信長、徳川家康、武田信玄の使用した種類は、オオタカ、豊臣秀吉のものはハヤブサであった。大名以上の人だけが行ったタカ狩りが、東北地方の農民に受け継がれている。ここは極めて意義深い。

鳥・随想

新潟市海岸林における

アカモズの新住宅事情

千葉 晃

アカモズはカッコウやアオジと共に初夏の高原や疎林を代表する鳥種として紹介されている事が多い。だから、クロマツを主体にニセアカシアが混在する新潟市の海岸林に住んでいてもちっとも変ではないが、高原の明るい林に住む鳥と思い込んでいる人達にとって、大都市でこの鳥が繁殖しているのを見聞きする事は一寸した驚きと思われる。昭和41年に新潟市にやって来た私も実はその一人であり、護国神社や青山の海岸林でこの鳥がクログミと共に賑々しく囀っているのを目の当たりにした時は、予想外の喜びであった。あれから20数年が経ち、彼らの住処も大分変わってしまった。道路が整備され、建物がじわじわと松林を狭めてきた。一方、クロマツの木々もかなり成長し、所によっては、かなり密な林が形成され、枯損木も目立つ様になってき

た。この様な変化の中でアカモズは当時と較べて目立って減少した様に思われる。私の勤務する大学構内の北側には、ニセアカシアの優勢な松林が細々と残っており、ここ数年毎年アカモズの夫婦一組がやって来てヒナを育てている。親鳥はいつも構内の木立や人工構築物に止まり芝生の上に舞い降りては餌を採り、裏手の林の方に運んでいる。だから、構内の芝生という名の食卓には、雑草の種子を食うカワラヒワ、半地下の虫を食うムクドリ、地表の虫を食うハクセキレイに混じってアカモズが仲間入りした事になる。今シーズンは、彼らの巣と子育ての様子を間近に観察する事ができた。5月中頃芝生で餌を取った雄鳥の行方を追ったところ、あまり警戒する様子もなく一直線に建物のすぐ脇にある藤棚(高さ2.5m)にすべりこんだ。抱卵中の雌はその餌を飲み込むと雄と入れ代わって林の中に消えた。抱卵も育雛もほぼ順調に進んだ様子で、6月27日には最後の雛が巣立った。この間、藤棚の下には、何も知らない学生達が集まっては談笑したり弁当を広げたりしていた。巣立ち直前の2日間は学園祭が開催され、ロックコンサートなどが騒々しくに繰り広げられた。雛達がやっと枝渡り出来る程度の幼さで巣を離れたのは、学生の騒ぎに驚きそして恐れを抱いた親鳥のあせりがあったのかも知れない。あるいは、時々窓から睦まじい生活をこっそり覗いたり、巣の真下のベンチに大の字になって寝た振りをするいやらしい中年の「鳥好き叔父さん」がいたせいかもしれない。はたまた、学生達のオカマ大会まで見せられて、雛の教育上よろしくないとの判断が働いたのかも知れない。夏休みになって構内が静かになったある日、風に飛ばされたアカモズの古巣を拾った。よく見ると、巣材として人工物のなんと多い事か。まるで昨今のカワラヒワの巣並みである。キャンデイの包み紙、テグス、タバコのフィルターなどなど。複雑な思いでこの古巣を保管する事にした。

重要生息地調査県内20箇所を提出

保 護 部

すでに「野鳥」誌3月号(38頁・41頁)でご覧になっているように、日本野鳥の会として、後世に残すべき野鳥の重要な生息地について、全国的な規模で調査してとりまとめ、その目録を作製して公表するとのことであります。広く会員の協力のもとに調査して、4月末までに本部へ提出することになっておりましたが、保護部の私の所に書類が届いたのは4月9日頃でした。急いで各地の現地を知っている方々に調査用紙(アンケート用紙)を送って書き込んでいただくと共に、新聞切抜きのコピーや調査資料などもあったら一緒に送ってもらいました。お願いした方々には短期間に調査用紙(B4表裏)の記入や資料の取揃えなど、大変ご苦勞をおかけしました。お陰様で県内20ヶ所の重要生息地を提出することができました。送っていただいた調査紙はコピーして保護部で保管し、今後必要に応じて役立てたいと思っております。

重要生息地として提出した箇所は次の通りです。()は調査用紙記入者の氏名。

- ・日尊ノ倉山(渡部 通)
- ・福島潟(藤田英忠)
- ・瓢湖(本間隆平)
- ・菅名岳(渡辺範雄)
- ・新潟市太夫浜(藤田英忠)
- ・鳥屋野潟(石部 久)
- ・佐潟(千葉 晃)
- ・長岡市信濃川河川敷(渡辺 央)
- ・大白川(柳瀬昭彦)
- ・北の岐川(柳瀬昭彦)
- ・巻機山(山本 明)
- ・当間山(木下 弘)
- ・柏崎市悪田自然緑地(小林成光)
- ・黒姫山・米山・八石山(小林成光)
- ・福浦八景(小林成光)

- ・朝日池(山本 明)
- ・火打山(山本 明)
- ・海谷溪谷(鷲沢澄雄)
- ・白馬・蓮華地域(山本 明)
- ・粟島(渡辺 央)

これらの箇所は、渡り鳥(特に水鳥類)の越冬地や中継地、稀少種(イヌワシ・オオタカ・ハヤブサ・ライチョウなど)の生息地、開発や伐採の問題で保全運動が起った所です。この他にもまだあると思われませんが、充分検討する余裕がありませんでした。なお、佐渡郡については、佐渡支部がありますので、そちらにお任せすることにして対象外としました。また今回の調査は本部の意向のように、広く一般会員の協力のもとに進めるべきところでしたが、その時間的余裕がありませんでした。(山本)

福島潟・鳥屋野潟・佐潟・朝日池を ラムサール条約の登録湿地へ

ラムサール条約 — 正式には「特に水鳥の生息地として重要な湿地に関する条約」は、水鳥特に2国またはそれ以上の国にまたがって移動する渡り鳥について、その繁殖または越冬地として重要な湿地(湖沼も含めて)を、周辺諸国が協力して保全するのが目的です。そのような湿地を締約国は条約事務局へ登録して、保全を図ることになっています。わが国もこの条約の締約国になっていますが、登録湿地はまだ3箇所です。日本野鳥の会は、第5回の締約国会議が1993年に釧路で開かれるのを機会に登録湿地をもっと増やす運動をすることになっており、支部としても標記4箇所の湿地を登録湿地とするよう、取り組んでゆきます。

末っ子 “チビ”

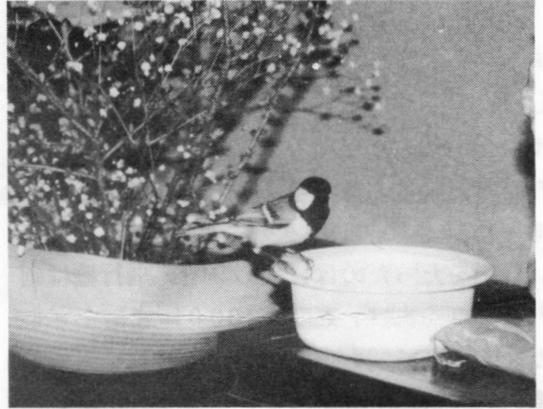
岡田正衛

“末っ子”と言ってもこれはシジュウカラのことです。昨年の春、我が家の巣箱に5羽生れたうちの末っ子で、飛ぶ力も無い未熟児でした。

不思議なことに、この子は親離れした7月中旬以降、私が部屋に居れば部屋まで入り、玄関先に居ればその場所で掌に乗って餌を食べます。今でも日に4~5回は姿を見せられますが、本当に孫のように可愛いくて“チビ”と名付けました。そして飛んで来るのを待つ楽しみが生活の一部になってしまいました。

3月30日に巣作りを始めた親鳥は我が家の餌場へ来る常連で、雛の誕生を楽しみにしていました。4月6日に卵を産み、抱卵が通常の2週間を過ぎても続いているので心配していたところ、4月27日から育雛が始まり愁眉を開きました。育雛期間は大体文献どおりの日数で先づ3羽が巣立ったのは5月15日でした。翌日残る2羽が巣穴から飛び出しましたが、うち1羽は飛ぶ力も無く地面に置き去りにされました。見るに見兼ねて掌の中に保護しましたが、羽根も満足でなく頭の両側にウブ毛をヒラヒラさせている未熟児でした。

“元気になれよー”と祈るような気持で親と逢うまでの4日3晩“すり餌”で面倒みま



したが、生きようとする眼指しは真剣そのもので抱くと私を長いこと見詰めていたものです。

この雛が、私の掌に乗る“チビ”なんです。ところで、どうしてこの子だけが掌に乗ったり、股の下まで潜って餌を食べるのでしょうか。思い当たる点を整理してみました。その一つは、親が常連で一諸に部屋まで入って餌を食べていたことです。もう一つ考えられることは、未熟児だったので親離れが兄姉よりも遅れ、一本立になって仲間外れにされていつも一人ぼっちであったことです。

そんな環境の中での一つの切っ掛けは、7月中旬うたた寝していた私の手先にひょっこり止ったのが習慣になったようです。

とは言うものの本当のこと私はこう思いたいのです。「三つ子の魂百までも」の諺のとおり、チビはあの巣立ち雛のとき掌に抱いてもらった感触が、もって生まれた天性と相俟って憶い出されたのではないかと。そんな感傷に浸ります。

野鳥観察を始めて4年になりますが、この経験は最高であり、未熟児のチビは一生忘れられない“宝の鳥”として心に残るでしょう。

—野鳥とのふれ合いは私の生きがいです—



〈旅行記〉

オーストラリアの鳥

勝俣将明

赤道をへだてて、日本と反対の位置にある国、オーストラリアへ今年の8月下旬に渡豪した。南半球に位置する国なので、四季は日本と正反対、すなわち、私がオーストラリアを訪れたのは、冬から春へうつりゆく季節であった。

成田をたったのは、夜の9時、飛行機は刻々と高度をあげ、高度12000kmまで上昇した。5～6時間も寝たのか、ふと眼をさまし窓の外をぼんやり眺めているとそこには、オリオン座の三星が美しく、またたき、飛行機が南半球上空に至ったことを実感させられた。

翌朝7時、飛行機はオーストラリア南部の大都市、シドニーに到着した。

シドニーは、テレビや雑誌でおなじみのオペラハウスがある。街は、南半球随一の歓楽街・キングス・クロスがあり、街並みは日本の東京を思わせるものである。

街には、1日中車があふれている。驚いたことには、日本車がとても多い、現地のガイドに尋ねると、40%ほどが日本車だそうである。道路も、左側通行で日本の都市と変わらなく、なんだか複雑な気持ちをもった。しかし、車の部品で1つだけ日本と違うところがあった。その部品とは、エレガントな町並みには似ても似つかないもので、乗用車に限らずバス・トレーラー、そして高級車のベンツにまでついているのである。とても不思議な思いにかられ現地の人に聞くと、これがないと車が壊れてしまうのだそうである。

部品は、すべての車の前方、バンパーにすべて取り付けられている。がっしりとしていかつい雰囲気を出すこの部品を現地の人はカンガルーバンパーと呼んでいた。

大都市シドニーといえども数十分ハイウェ



シドニーの街並み

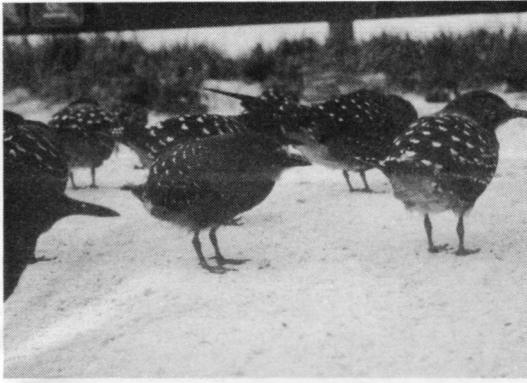
イを走るとそこは森や砂漠地帯が広がっており、日本でよく見かけるタヌキやキツネ、それ以上にカンガルーなどの野生動物が生息しているのだそうである。日本のように小型の動物なら車もダメージをうけないが、大型のカンガルーでは車ももたないということである。さすが日本の22倍の面積をもつ国、その壮大さには圧倒させられた。

翌日は、シドニーから北へ4000km離れたケアンズという町へ向かった。飛行機の窓からは、広大な大地・緑の木々が海原のごとくひろがっているのが見えた。そして、海原からは白い柱が空にむかってのびていた。

白煙がたちのぼる木々の海原は、Rain forest (熱帯雨林) 今、話題の森である。

ある学者からこんな話を聞いた。熱帯雨林は、年間にほぼ日本の面積と同じくらい地球上から姿を消していく。このまま熱帯雨林の開発、伐採が続くと、あと20年ほどで地球上の酸素は少なくなり、人間は酸素の少なくなった水槽に入った魚同様に口をパクパクするそうである。

ケアンズに着くとすぐに熱帯雨林の森へ足をはこんだ。森に数歩足を踏み入れると、空気は思っていたよりさわやかであった。驚い



セグロアジサシの幼鳥たち

たことには、森を歩いたときにコツコツと音が響きわたるのである。手を触れてみるととてもかたい地面をしていた。

熱帯雨林は、植物も動物も多種にわたって生息することができる豊かな森である。しか

し、豊かな森ができあがるまでには多くの年月がかかる。

森は、雨期には雨が川のように流れ、表土そして、ふりつもった木々の葉もきれいに流されてしまう。乾期は、乾燥し、表土を流した地面をよりいっそうかたくしまらせてしまう。森が子孫を残していくためには、朽ちた老木が必要なのだ。老木が、雨期の雨から乾期の乾燥より、種子を守りやがては一本の木へと育つための土台となるのである。

オーストラリアへの旅、もちろん日本では見ることのできないたくさんの珍しい鳥を見ることもできた。しかし、それ以上に地球の環境について深く考えさせられる旅でもあった。

春の総会・探鳥会報告

事務局

県支部の春の総会、探鳥会は、6月1,2日と南魚巻機山麓で行なわれました。総会の会場の民宿「雲天」は巻機山の自然をこよなく愛す御主人が山菜料理で歓迎してくれました。

総会はスムーズに議事が行なわれ、年々調査・研究と保護問題がクローズアップされていく感じがしました。研修会では渡辺央氏より、県支部が行った巻機山の調査報告があり、研究部の巣箱調査について小池重人氏より紹介がありました。スライドでは、岡田成弘氏が毎年撮影し続けているカナダ・アラスカの自然の中から雄大な自然と、そこに生きる動物達が美しいスライドで映し出され、同宿の人も飛び入りで鑑賞する一幕もありました。

翌朝の探鳥会は、健脚登山コースは巻機山山頂までと、自然観察コースは民宿から桜坂までの2班に別れて行いました。

桜坂、山麓コース

山麓コースは大島支部長以下20名で登山より自然散策という感じでスタートしました。溪流に沿ってキセキレイやオオルリが美しい

囀りを聞かせ、林道に入り、サンショウクイ、キビタキ、イカル、ヤブサメ、オシドリ、コマドリ、コルリ、クロツグミ、ブッポウソウ、ハチクマ等31種が確認されました。

井戸尾根登山道コース

参加者はマッカーシー夫妻を含めて9名、脚には自信のある方々だった。以下出現鳥種と状況を記す。

- ◇桜坂駐車場(730m)～五合目(1128m)
：ホオジロ、カケス、ヒヨドリ、メジロ、クロツグミ、ウグイス、サメビタキ、コルリ、カッコウ、センダイムシクイなど。
 - ◇五合目(1128m)～七合目(1564m)
：オオルリ、コメボソムシクイ、センダイムシクイ、クロジ、トラツグミ、キビタキ、コルリ、ウグイス、シジュウカラ、ジュウイチ、ミンナザイ、ツツドリ、ヒガラ、ウソ、ゴジュウカラ、カッコウ、など。(比較的多かったのはコルリ、ウグイス、ヒガラなど)
 - 七合目から八合目のニセ巻機山にかけて、ハクサンシャクナゲの赤い花が満開で、みごとな美しさを呈して印象的だった。ここからは自由行動としたが、幸い雨も降りそうでないので、山頂までほとんどの方が登って探鳥した。
 - ◇七合目(1564m)～巻機山頂(1962m)
：ホトトギス、カヤクグリ、ホシガラス、ビンズイ、メボソムシクイなど。(この付近は定着繁殖には少し早いようであった)
- 山頂付近ではガスがかかっていたが、時折さっと晴れて遠く越後三山が望見された。(山本)

〈新潟県探鳥地散策シリーズ〉

「竜ヶ窪・鱒池」

福原 毅

竜ヶ窪は津南町を横断する形で流れる信濃川によって形成された河岸段丘上にある。

全国名水100選のなかでも屈指の湧水量を誇り、古くから地域の生活用水として利用されてきた。深い森に囲まれ昼なお暗く多くの伝承を持つ池であったが、近年伐採が進みスギの植林も一部で行なわれている。しかし、まとまった広葉樹林が残されていて探鳥地としても良好であるといえる。近くの小学校では毎年春、探鳥会が行なわれ、地域の子どもたちに親しまれている。

高木層にブナ、ミズナラ、コシアブラ、ウリハダカエデなどが続き、低木層にオオバクロモジ、ユキツバキといった典型的な日本海側多雪地帯の植生で、森林性の鳥が多い。春にはキビタキ、オオルリ、クログミなどのブナ林を代表する鳥たちを見ることができる。カラ類も多く、冬はかなり大きな混群をつくっている。小学校の探鳥会では毎年30種前後が観察されていて、今年はオシドリ番いも確認された。繁殖に森林と池沼の両方が必要なオシドリの生息は、竜ヶ窪の特徴をよくあらわしていると思う。

竜ヶ窪の周辺には多くの池沼が点在していて、鱒池（立石の池）もその一つである。竜ヶ窪の湧水の一部もここに流れこんでいる。

竜ヶ窪は水温が低く日射量も少ないため藻類の繁茂が少ない。また、岸から急に深くなっているので抽水植物帯が形成されないといったことから、意外と水鳥が少ない。一方、鱒池のほうは、ヨシ、マコモなどからなる抽水植物帯が大部分を占め、県内でも珍しいミズドクサの大群落がひろがっている。かつて養魚場として利用されたことから魚も多いようで、一年を通じて水辺の鳥が観察できる。



津南町・鱒池（立石の池）

湧水池のためか冬でも開水面が確保されていて、カモ類の越冬地となっている。今年のガンカモ調査にあわせて、鱒池でも調査を行ったが、カルガモ、コガモ、マガモが合計約110羽確認された。豪雪地帯で、しかも大きな湖沼のない津南町では貴重なカモ類の生息地であるといえる。雪溶けの頃には渡りの途中のキンクロハジロやホシハジロが見られカイツブリが繁殖をはじめ始める。カルガモの番いやアオサギも見られ、オオヨシキリが2,3番いテリトリーをかまえる。

3年前、これらの多くの湧水池の水源涵養地帯となっている一段上の段丘面に大規模なゴルフ場の開発計画が浮上したが、竜ヶ窪をシンボルに反対運動が展開され、昨年この計画は白紙撤回という形になった。名水指定以来、竜ヶ窪は一大観光地となり、年間約3万人の人が訪れるという。物見遊山の人、水をくんでいくだけの人がほとんどだと思うが、ここが全国的にも貴重な湿地環境であること。そして地域の人々の生活にかかせない水源地帯であることを、訪れた人だけでなく地元の人達にも理解してもらうことが以前にも増して必要になってきたようだ。

発行	1991年12月10日	No. 32
発行人	大島 基	編集者 滝上 哲哉
事務局	日本野鳥の会新潟県支部	
	〒950-21 新潟県新潟市五十嵐西15番地38号	
	☎025-261-1416	石部 久 <振替・新潟1-6002>